

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32634
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：17K03557
研究課題名（和文）新しい明六社研究 私塾・結社における伝統と近代

研究課題名（英文）New research on Meiroku-sya

研究代表者

菅原 光（Sugawara, Hikaru）

専修大学・法学部・教授

研究者番号：90405481

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：明治前期の思想界をリードした明六社に注目し、その政治思想史的意義を解明した。とりわけ、明六社が何を自指して結成されたのかについての調査と検討を行ってきたが、その結果、従来言われてきたような演説の結社であるという特徴以上に、明六社は討論する結社であろうとする所にこそ、著しい特徴があったという理解に至った。彼等にとって、演説は討論を成り立たせるための手段であり、より重要なのは討論だったのである。彼等は討論の意義を強く感じると共に、その難しさをも同時に認識していた。だからこそ、有意義な討論が成立するための条件を模索し続けていた。本研究では、その軌跡を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代民主主義社会においては、討論を通じた合意形成の重要性自体は自明とされ、疑われることもない。しかし、現実に行われている討論は形骸化し、原案を通すための通過儀礼、ガス抜きのための儀式に墮している側面もある。そのようなものに成り下がった討論の実質化こそが民主主義の再生に重要であるという指摘があるが、前途は多難である。このような状況において、明六社同人達による討論を成立させるための条件についての考察を跡付けた本研究は、現代的な意義を有すると思われる。

研究成果の概要（英文）：I examined the feather of “明六社” society. I examined mainly the purpose of organizing this society. This research and study has shown that “明六社” is able to be appreciated as society for discussion but as speech. The speech is also important in order to be realized discussion. They considered the condition for realizing discussion. I traced it.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：日本政治思想史 明治政治思想史 明六社 討論 西周 津田真道 阪谷素 福澤諭吉

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本で初めて結成された学術結社として、明六社は近代日本思想研究において常に重視され続けてきた。とりわけ、機関誌である『明六雑誌』に関しては、発行の経緯などの周辺情報も含め、詳細に明らかにされてきた。しかし他方、明六社そのものについては未解明の部分も大きい。

『明六雑誌』に掲載された諸論考についての研究は豊富にある一方で、明六社という組織そのものの実態については、大久保利謙らが明らかにした基礎的事項以外には、ほとんど手つかずというのが実態である。残存資料の制約という問題があってやむを得ない部分があるものの、新史料の発掘という課題の他、従来とは違った角度からの検討の必要性があると考えられた。明六社はこれまで、「ウェスタンインパクトの受容と反応」の先駆的な例という位相で捉えられ、画期性を、しかも「啓蒙」などという不正確なキーワードによって強調されて理解され過ぎてきたからである。史料不足によって実体解明が不十分だった部分が、「近代化」とか「啓蒙」といった安易なストーリーに頼ることによって埋められてきた感がある。しかし、明六社に参集した思想家が依拠した西洋思想は、ベンサムや J.S.ミルなど、啓蒙思想を批判し乗り越えることで成立した次代の思想家達であったし、彼ら自身は啓蒙という語をほとんど用いていなかった。そこでは、ある意味では学術結社であったとも言い得る江戸時代の私塾のような 18 世紀日本の経験は等閑視されてきた。江戸の知的経験と比べ、明六社はどこまで画期的だったと言えるのだろうか。連続と断絶について改めて検討する必要がある。また、明六社結成直後には、ほとんどタイムラグなしに、共存同衆、洋学社といった学術団体が結成されている。そのような学術団体との比較なしには、明六社の画期性、意義は、明らかににはなり得ないはずではないだろうか。本研究の出発点には、以上のような問題意識が存在していた。

2. 研究の目的

本研究は、明六社を中心に据えて明治政治思想を捉え直そうとする研究である。明治思想における明六社の重要性は周知のことであり、機関誌である『明六雑誌』の諸論考に関する研究は厚みをもって為されてきたが、明六社という団体そのものについては明らかになっていなかった。演説会や運営の実態、雑誌廃刊以後の活動については、ほとんど手つかずの状態だったのである。本研究は第一に、『明六雑誌』研究とは区別された明六社という組織についての研究であり、第二にその基礎的な研究を踏まえた上で、明六社の実態を解明し、明治政治思想の捉え直しを試みるという、新しい視角からする明六社研究であった。

3. 研究の方法

従来の研究が依拠してきた西村茂樹の自伝や加藤弘之日記以外の、明六社の主要メンバーに関する未公開史料の収集と調査、通信員についての追跡調査を行うことによって、『明六雑誌』廃刊以後の活動を含む明六社の全容解明を目指してきた。特に重視したのは、以下の 3 点である。

第一に、明六社の成立過程、雑誌廃刊以後の明六社の活動実態についての調査である。従来から重視されてきた西村茂樹の自伝、加藤弘之日記の綿密な読み直しに加え、これまでの研究で重視されてきた、西村や加藤、森有礼以外の明六社同人、例えば、阪谷素や中村正直らの明六社との関わりに関心をもってきた。

第二に、江戸の知的伝統についての調査と検討であり、とりわけ、江戸時代の私塾に注目した。江戸に“society”の訳語としての「学術結社」はなかったのは間違いないとしても、18 世紀頃から数多く結成され盛んに活動が開始された私塾は、ある意味では「学術結社」的な団体だったとも言い得るのではないかという発想が根底にあった。古義堂や藪園塾は、どこまで、明六社と

違う存在なのだろうか。どこまで明六社の前身に当たる存在として比較検討し得るのだろうか。私塾と学術結社との間の連続と断絶について、改めて検討した。

第三に、明六社同人達についての最新の研究成果を踏まえた検討である。近年、個々の思想家についての個別研究は、著しく進んでいるが、それらの成果を明六社研究として位置付け直すという作業は行われておらず、それが可能かどうか不明な現状である。最新の個別研究の成果を組み合わせ検討し直すことで、明六社の全容は、従来考えられていたイメージとどこまで違うものかと検討した。

4．研究成果

多くの史料調査を行ったものの、従来から知られている明六社の実態以上の知見を得ることにつながるような新史料の発見には至らなかった。しかし、明六社同人達が著した文章を丹念に読み解くことによって、明六社を象徴するものとして位置づけられ続けてきた「演説会」の開催は、必ずしも第一の目的とされていたわけではなく、「討論」を実現することこそが、明六社結成の最大の目的であった側面があることが明らかになった。「演説」は、そのための足がかりになり得るものとして、注目されたに過ぎない。さらには、目標であった「討論」どころか、足がかりに過ぎなかったはずの「演説」ですら、その目的を従前に達することができていないという自覚を持つメンバーが多く、それゆえ彼等は、「討論」を実現させるための条件を深く考察するという課題へと駆り立てられていったことが分かった。討論の条件の模索こそは、『明六雑誌』廃刊以後まで含めて継続した明六社同人達の思想的課題だったのかもしれない。

江戸時代の私塾との比較を通じ、明六社の特徴を問い直すという本研究の検討によって、明六社の画期性は、従来よりも弱めに見積もることにつながりかねないという思わぬ結果に至った。しかし他方、当時における新しさを強調する観点は、現代からみれば既に時代遅れであり、懐古趣味的に明六社を眺めるだけに終わる可能性もある。従来の明六社研究に無縁だったとは言えない側面であろう。それでは、明六社研究は、狭い意味での歴史研究ではあり得ても、思想史研究としては存立し難いものになってしまう可能性もある。むしろ、明六社の実際の意義を江戸の知的伝統の中に位置付けることを可能にした本研究は、単なる新しさとは区別された、現代までをも含めたより広い思想史上の展開の中で明六社を捉え返す地平を切り開くことにつながり得る。

明六社という団体が明治期の政治思想史上に果たした歴史的意義を検討し続けることに加え、「討論の条件」を模索し続けるものとして理解し直した明六社の知的営みを、現代の民主主義論との関連で検討するような研究を、今後さらに進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菅原光	4. 巻 37
2. 論文標題 近代日本儒教與「功利主義」 西周為中心	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 當代儒學研究叢刊	6. 最初と最後の頁 15-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原光	4. 巻 49
2. 論文標題 〔書評論文〕 前田勉『江戸教育思想史研究』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 202-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 菅原光、相原耕作、島田英明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 308
3. 書名 西周 現代語訳セレクション	

1. 著者名 鈴木 健一ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 355
3. 書名 明治の教養：変容する「和」「漢」「洋」	

1. 著者名 日本思想史事典編集委員会、日本思想史学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 718
3. 書名 日本思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----